

# 宇宙の思い出

園部まりあ

## 登場人物

山田フミコ（一〇〇歳を迎えた老女）

オリン

クマモト（TMI研究所の新任研究員）

パク博士（TMI研究所の医学博士）

トコイ先生（TMI研究所の名誉教授）

テオゲネストロープ

南方遊起（四人組）

## 第一場 プロローグ

ベッドが一つ。クローゼットが一つ。  
上方に小さな窓。そこから月光が差し込んでいる。  
ベッドの脇に小さなサイドテーブル。  
一組の簡単な椅子とテーブル。簡易ソファがある。

病院の検査着のような服を着たおばあさん（山田フミコ）が小さな包みを抱えて現れ、舞台上のささやかなインテリアを見回す。

クッションを確かめるようにベッドやソファーに腰かけてみる。

自分の着ている検査着のようなものを見て袖口や裾を点検する。

小窓から外を見ようとすると爪先立っても届かない。

持っている包みからハンカチと写真立てを取り出すと、ベッドの脇の小さなテーブルの上にハンカチを置いていねいに広げて写真立てを置く。

ウォークマンを取り出してイヤホンを耳に入れる。

薄暗がりの中、かすかに太鼓の音が聞こえてくる。

月明かりが差し込む部屋の中にいつのまにかアフリカの民族衣装のようなものをまとった四人の男が現れる。手には太鼓やタンバリンのような楽器を持ち、音楽に合わせて踊りだす。

四人は踊りの合間に質素なインテリアをひとつずつ華やかなものへと替えていく。

ベッドにはレースの天蓋がつき、ソファーにはふかふかのクッションが置かれる。

おばあさんには袖と裾にレースのフリルのついた寝間着が渡される。

おばあさんは頭からそれをかぶる。

四人組の一人が小窓のへりに手をかけてひっぱると窓が大きくなり、月明かりが広がる。

音楽はしだいにぎやかになり笑い声や掛け声が混ざってくる。4人組はにぎやかに踊り続ける。おばあさんは楽しそうに見ている。

## 第二場 TMI研究所のフミコの部屋

一場の終わりと同じインテリア。中央に小さな花壇が増えている。朝。山田フミコというゼッケンを胸につけたおばあさんがベッドに腰掛けて新聞を読んでいる。

フミコ「オオアゴニセカバモドキが消える。あらま・・・昨夜TMI研究所の第一研究室に保護されていたオオアゴニセカバモドキがいなくなっていることを見回りの警備員が発見した。扉は施錠されたままになっており、水槽に触れると作動する警報もなかった。警察は内部の者の犯行とみて調査を開始している。内部の者つて・・・ぶっそうだねえ。オオアゴニセカバモドキは心臓再生に有効なエキスを持ったため数年前までは高額な闇取引の対象となり相次ぐ密漁に手を焼いていたが、急激に生息数が減少したため絶滅危惧種として保護されていた。昨夜盗まれたものが事実上最後の一匹とみられる。へえ、最後の一匹・・・ついに最後の一匹になっちゃったんだね。でも盗むったってねえ・・・お魚だからね。難しいでしょ。水槽でも背負ってしのびこんだのかね。ええと・・・今日は何の日・・・五年前の今日、パフォーマンスグループ南方遊起のメンバー、ウンガリヤドットが・・・そうだよ、知ってるよ。ちゃんと覚えてるよ。もう十五年たつんだね」

古き良き英国調のスーツを着た紳士（オリン）が窓から顔を出す。

オリン「おはようございます、フミコさん！お誕生日おめでとうございます！」  
フミコ「オリン！今年も来てくれたんだね。おぼえててくれたんだね」  
オリン「もちろんですよ。一〇〇歳のお誕生日おめでとうございます！」

オリンは小さな花束を持って窓から入ってくる。

フミコ「ありがとう。一〇〇歳だなんてさ。くたびれたもんだ」  
オリン「まだまだ元気ですよ。」

フミコ「いったいいつまで生きることやらだよ」  
オリン「あてっこしますか？」

フミコ「現実的などこであと五、六年だね」

オリン「二〇年は行きますよ」

フミコ「まさか」

オリン「ここにいるならいきます」

フミコ「困ったもんだね。そんなに長生きしていいもんかね」

オリン「長寿は人類の夢でしょう」

オリンは持ってきた花を中央の花壇に植え替える。

フミコ「二〇年後なんて・・・体だってどうなってることやらかんないんだから  
さ・・・今だってもう自分のものっていえるのは首から上と手足の骨と・・・

食道と、心臓でしょ、小腸でしょ、それから・・・どこだっけ？」

オリン「右の肺じゃないですか？」

フミコ「そうだ右の肺もだ」

オリン「まだそんなにあるじゃないですか」

フミコ「そんなになって・・・あたしはもう、どこまでが自分でどこからが他人か

わからなくなりそうだよ」

オリン「今年はどんな実験ですかね」

フミコ「もうすぐわかるよ。お昼前には博士が来るからね」

オリン「薬か何かの簡単な実験だといいですね」

フミコ「薬？記念すべき100歳の年にかい？」

オリン「あっ、皺取りなんていいですね」

フミコ「急に美容方面に行くのかい」

オリン「違いますかね」

フミコ「どうせなら髪の毛の方がいいよ。もうだいぶ薄いから」

オリン「そうですね」

フミコ「どっちにしても首から上って気がしてきたよ」

オリン「あんまり負担のかからない実験だといいですね」

フミコ「どんな実験だって文句は言えないよ。これはあたしの仕事、おかげさまでここにいられるんだから」

オリン「それはそうですけど」

フミコ「雨露しのげるってのはいいもんだよ」

オリン「お昼は何が出来ますかね」

フミコ「お寿司にケーキ。毎年そうだよ」

オリン「フミコさんの大好物ですからね」

フミコ「うん。お寿司はいつ食べてもおいしいね」

オリン「フミコさん、覚えてますか？いつだったかのお誕生日にピザの食べ過ぎでおなか壊した年があったでしょ」

フミコ「あったあった、ぼろアパートにいた頃。よく覚えてるね、オリン」

オリン「あちこちの宅配ピザ屋に注文電話かけて」

フミコ「あのころは通話の記録をなんとか作らなきゃって誕生日が来るたび、疲れ果ててたよ。きて欲しいときに限って詐欺電話一本かからないんだからさ」

オリン「そんなもんなんですよ」

フミコ「電話帳抱えてハーフサイズ一枚でも配達してもらえろぎりぎりの距離のどこまで電話したよ」

オリン「フミコさんは毎年いろいろ工夫してました」

フミコ「苦勞したよ。あのばかばかしい政策のおかげで。世間では誕生日ってのはとりあえず誰かと話す日ってことなんだろうけどさ」

オリン「一人暮らしの年よりの暮らしぶりを調査するには誕生日が一番わかりやすいんでしょね」

フミコ「だけどピザはいい考えだったよ。ついでに来客の記録も作れるしね」

オリン「ほんとにいい考えでした。フミコさんもうっかり自分のお誕生日を忘れさえしなければ、ここに来ることもなかったんでしょけど」

フミコ「そうならもうとつくに死んでるよ。」

オリン「十五年前でしたっけ？」

フミコ「そう、もう十五年だよ」

オリン「ほんとに赤紙が来たんですか？」  
フミコ「来たよ。孤独死危惧高齢者のレベル4です、だってさ」  
オリン「フミコさんもレッドリストにのったんですねえ」

クマモトが入ってくる。中央にある花壇をよけずに踏み潰してくる。

### 第三場 前場の続き

クマモト「おはようございます。山田フミコさん」

フミコ「あら、誰？」

クマモト「ぼく、今月からこちらの研究所に配属されましたクマモトです」  
フミコ「あー、あなたがクマモトさん」

クマモト「パク博士の助手をつとめさせてもらいます。よろしくお願いします」  
フミコ「こちらこそよろしくね」

クマモト「調子はどうですか」

フミコ「いつもと変わりないよ」

クマモト「昨夜はよく眠れましたか」

フミコ「おかげさんで」

クマモト「それはよかったです。はい、これ。お誕生日おめでとうございます」

クマモトは持ってきた鉢植えの花を渡す。

オリンが花壇の踏み潰された花をなおす。

フミコ「あら、きれいだね」

クマモト「山田さんはお花が好きだって聞いたんで」

フミコ「一番のプレゼントだよ。ありがとうね。今朝は博士は？」

クマモト「今日は往診が午後になるのでご挨拶もかねて僕がうかがいました」  
フミコ「そうかい」

クマモト「山田さん、今日で一〇〇歳ですね」

フミコ「そうなの。まったくね、自分でもびっくりしちゃうよ」

クマモト「こんなにお元気ですばらしいことです」  
フミコ「ありがとう」

クマモト「この前の検査の結果も見せていただきました。ほんとに優秀で驚きました」

フミコ「あらそう」

クマモト「この体調なら新しい実験に挑戦してもらっても大丈夫です」

フミコ「今度は何の実験？」

クマモト「今度のは少し大きな手術になりそうです」

フミコ「あらま」

クマモト「心配ですか」

フミコ「別に心配じゃないけど、今年は薬かかって思ってたの」

クマモト「安心してください。危険なことは全然ありませんので」

フミコ「どこを切るの？」

電話が鳴る。

クマモト「すみません」

クマモトはポケットから電話を出す。

クマモト「はい。今山田さんのところですよ。東棟のRX2の3にいます。わかりました。すぐ行きます」

フミコ「忙しいんだね」

クマモト「すみません。朝から」

フミコ「今朝は外もにぎやかだね」

クマモト「はい。今日はちよつとばたばたしてて。でももうすぐ落ち着くと思います」

フミコ「そう」

クマモト「手術の詳しい話はのちほど博士からすることになります」

フミコ「はいはい」

クマモト「それではまたあとで。お昼ご飯はごちそうですよ。それにちよつとし

「たお祝いのイベントもあるみたいですよ」

フミコ「あら、何だろう」

クマモト「どうぞお楽しみに。それでは失礼します」

クマモトはまた花壇を踏みつけて出ていく。

オリンがまたなおす。

オリン「薬じゃなかったですね」

フミコ「え？ああ、そうだね」

オリン「少し大きな手術って言ってましたね」

フミコ「ほら、きれいな花だね」

オリン「私のと偶然同じ色でしたね」

フミコ「そっちは赤にしようか」

オリン「はい」

フミコは花をサイドテーブルの写真たてのそばに置く。

オリンは花壇に植えた自分の花を赤に変える。

フミコ「そうか。あれだよ、きつと」

オリン「え？何がですか？」

フミコ「ゆうべの盗難事件。だからばたばたしてるんだよ」

オリン「盗難事件？」

フミコはオリンに新聞を渡す。オリンは新聞を見る。

フミコ「オオアゴニセカバモドキ。何者かに盗まれたんだって。でも手がかりなし。厳重に保護されている水槽から盗み出したんだから。なんだかちよっと面白いよ」

オリン「オオアゴニセカバモドキってあれですよね。あつ、やっぱりそうだ。心臓を再生させるエキスのある魚」

フミコ「そうだよ。一〇年くらい前まではしょっちゅう話題にのぼってた魚だよ」



オリン 「うおお、それにしても不細工ですね、この写真」

フミコ 「見た目はね。なにしろブルドッグの魚版って言われてるからね」

オリン 「なるほど、話には聞いてましたが・・・見れば見るほどグロテスクです」  
フミコ 「誰が何のために盗んだんだろう」

オリン 「そりゃ心臓の再生に必要なエキスがとれるからですよ」

フミコ 「一匹のエキスじゃ意味がないんだよ。一〇〇匹のエキスを集めてやっと  
ヒトの心臓一個分なんだから」

オリン 「へえ、そうなんですか。新聞にはこれが最後の一匹ってありますね」

フミコ 「取りすぎて絶滅危惧種のレッドリストにのったってのは知ってたよ。あ  
つというまに最後の一匹になっちゃったんだねえ。一匹じゃ役に立たない  
からね」

オリン 「じゃ目的はほかにあるってことですね」

フミコ 「ていうよりさ・・・あたしはどうしてこの研究所がそんな最後の一匹の  
役に立たないお魚を後生大事に保護してたのがわからないよ」

オリン 「あれじゃないですか？ほら、ニホンオオカミみたいに」

フミコ 「ニホンオオカミ？」

オリン 「いずれはく製にして飾るんじゃないですか」

フミコ 「何のために？」

オリン 「そりゃまあ絶滅した生き物ですから・・・」

フミコ 「だから？」

オリン 「よくわかりませんが・・・歴史の勉強のため？」

フミコ 「昔はこんな生き物がいましたよって？」

オリン 「まあ・・・はい」

フミコ 「あたしはそうは思わないけどね」

オリン 「違いますか」

フミコ 「だってここは人類の未来のためのTMI研究所だよ」

オリン 「はい」

フミコ 「絶滅した生き物なんてヒトの役に立たないものをおいとくかい？」

オリン 「なるほど」

フミコ 「脱線しちゃったよ。もう一回もどって・・・犯人の目的は何か・・・」

オリン 「うーん、ひよっとしたらレアなペットマニアってことも」

フミコ「だってこれだよ。いくらレアっていつてもき、水槽に入れて眺めたいと思う？」

オリン「いいえ」

フミコ「こんなことしなくても楽に手に入るかわいいペットはいくらでもいるんだからさ」

オリン「わたしはもうお手上げです」

フミコ「あきらめがはやいねえ。だけど、ここはあんたみたいには簡単には迷宮入りさせないだろうね」

オリン「どうしてですか」

フミコ「これはね、犯人にとってもこのTMI研究所にとってもあたしたちが思う以上に大変な事に違いなからだよ」

オリン「そーいいきる根拠は？」

フミコ「年の功だよ」